

学習者による日本人ゲストの活用2

若井誠二（カーロリ・ガーシュパール大学）
szeidzsi@yahoo.co.jp

1. 授業への取り組みと課題

筆者はここ数年『学び合い』という考えに共感し自らの授業に取り組む際の信念としている。『学び合い』の定義を一言で記すのは難しいが、教師が「学校・クラスというものは学習者が多様な他者と折り合いをつけて課題を達成することを通じてその有効性を学ぶ場」という学校観と、「1人の教師より学習者集団の方が有能である」という学習者観を信じ、これらのビリーフに従って「明確な授業目標・評価基準の設置」、「クラス全員が授業目標を達成するためにクラス全体が考え動くことの要求」、「方法レベルでの教師の非介入」、「学習時間の確保」等の学習環境を整備することにより生まれるクラス文化だと言える（例えば西川¹⁾）。

長期に渡る臨床的な実践・調査から、この『学び合い』の文化を享受したクラスでは、学習者が必要に応じて教室を立ち歩く等して自由に聞き合ったり教え合ったりしながら課題解決を図る様態が現れるようになり、結果として学習成果が上がり人間関係が改善される点が報告されている（例えば西川 2006）。また、学校側が指定した（『学び合い』文化を享受していない）クラスに対し、学校側が指定した教科・単元・内容を『学び合い』を知る大学教員が1単位時間のみ教えるという『学び合い』ライブ出前授業においても学習者の授業内容の理解度が校種、教科、単元に関らず（『学び合い』を行っていないクラスより）優れ、その定着が維持されるとの報告もある（三崎他 2009）。

学習者が聞き合ったり学び合ったりという学習者の姿から『学び合い』は協働学習の派生と見られやすい。しかし教授方法（方策）（学び合わせるための方法）である協同学習に対し、『学びあい』は上に記した学校観・学習者観を持つ教師が学習目標をクリアするために取る教授方略によって生じる文化であり、協同学習が示すような「（少人数グループで）学びあう」ことを目的としているわけではない²⁾。

筆者自身のこれまでの実践（若井 2008、2009、2010）では、学習者がハンガリー人のクラスの場合でも、教師が『学び合い』に取り組むことにより「多様な人と関わり合うことで自らの課題を解決しようとする」という学習者の姿が見られた。しかし一方で、2008/2009年度での実践では日本人ゲストとの関わりの点で以下のような課題を得ることとなった。

現象：

トムソン&舂見蘇（1999）は、日本人協力者がイニシアチブを取ると学習者が協力者のペースに巻き込まれてしまうと指摘しているが、若井（2010）では、学習者は自分達が学習のイニシアチブを取れる場合にはゲストをリソースの1つとして利用し、ゲスト側がイニシアチブを取る場合にはそれに従いながらローカルな会話をを用いて自分達の学習をコントロールするなど、ゲストの態度に合わせ（言うなれば）したたかに判断・行動し行動していることがわかった。ただし、学習者が学習のイニシアチブをとっている時の方が、より多くの他者の力を借り、より深く効率的な学習が可能であったのに

もかわらず、それを日本人ゲストに働きかけることはしなかった。

予想（課題）：

トムソン&舛見蘇は、上記現象を解決するためには教師が細かい環境の整備を行うことが重要と述べている。しかし、ここは学習者を信じ「教師そして特定のクラスメートが自分にとって最良の教え手でないように、ゲストも常に最良の教え手ではない」ことを語り、「学習目標をゲストの方に伝え、必要であれば自分達にとってよい形で動いていただけるよう理解を求める」ことを要求しても現状を十分に改善できるはずだ。（若井 2010 より。一部書き換え）

本論では、上記課題に対して行った取り組みとその結果について報告する。

2. 課題に対する取り組みと調査

若井（2010）との比較という意味もあり、2008/2009 年度同様、通称 0 学年と呼ばれる語学コースを調査対象とした。0 学年は CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠組み）に準拠した上級エーレッツェーギと呼ばれる「中等教育機関卒業試験」「高等教育機関入学試験」「国家外国語試験」を兼ね備えた語学試験受験のための準備コースであり、前期 3 ヶ月（2009/2010 年度は 9 月中旬から 12 月中旬）、後期 3 ヶ月（2009/2010 年度は 2 月始めから 4 月末）週 12 時間の授業で、初心者の学生（以下 0 年生）を試験合格レベル（日本語能力試験でいうと N4+ α ）まで上げることを目的としている³。コースは筆者ともう 1 名のハンガリー人教師が担当しているが、両者とも初級教科書（2009/2010 年度は「みんなの日本語 I,II」）を使いながら、それぞれが担当する課の学習内容に従い試験に必要な 5 技能（「読解」「文法」「聴解」「作文」「口頭」）を教えている。なお、以下の取り組み、及びデータはすべて筆者の担当授業におけるものである。

筆者が担当する授業では若井（2008,2009,2010）にも示した通り、『学び合い』における環境整備に基づき、基本的に以下のような手順で授業を行った。まず、授業開始時に授業目標を明示して確認し、学習内容や教師が授業で行う（はずの）説明を文字化した資料を配布した。そして配布資料について簡単に確認をしたり、会話文と一緒に読んで発音やアクセントなどの練習をした後は、0 年生達に資料内の課題に取り組むよう指示し、基本的には教師（筆者）は学習には介入しなかった。各授業時間は 120～180 分であったが、このうち教師がクラス全体に話す時間は 20 分～30 分程度で、残りは 0 年生が課題に取り組む時間にあてた。また、答えがある課題（例えば文法問題）については解答も同時に配布し「なぜこの解答が正しいのかクラス全員が説明できるようにせよ。」と指示し、決まった答えがないもの（例えば口頭練習や作文練習）に関しては、「クラス全員が自分の言葉で～について 5 文以上で説明できるようにせよ。」「クラス全員が、誰と議論をしても 3 ターン以上、お互いの意見を受け入れながら、自分の考えを主張することができるようにせよ。」と指示した。後者の場合、最後に全体でチェックを行うこともあったが、0 年生が課題に取り組んでいる間に個々に呼び、できるところ、足りないところをアドバイスするという形もとった（この際は「クラス全員ができるようにする」ため、個々へのアドバイスも、それをクラス中に可視化するように促した）。

さて、2009/2010 年度では「クラス全員が授業目標を達成するためにクラス全体が考え動くこと」への要求を更に明確化させるために、まず西川の『従来型指導的『学び合い』の手引き書』⁴（:32.）を参考に以下のような授業評価表⁵を作成し毎時間授業終了後にこれを記入させた⁶。

<p>授業目標：</p>
<p>評価：</p> <p>A：個人として授業目標を達成し、更にクラス全員が目標を達成するためにできる限り動いた。</p> <p>B：個人として授業目標は達成できたが、クラス全員が目標を達成するためにはまだ動きが足りなかった。</p> <p>C：AもBも達成できなかった。</p> <p>理由：</p> <p>学習内容等について、授業中に誰かからアドバイス等もらった場合、その人の名前を書いてください。：</p> <p>授業に関する意見・問題点など：</p>

また、日本人ゲストを授業内容に関係なく募集し、教室に行けば常に日本人ゲストがいるという状況をつくるよう心がける一方で、0年生に対しては（日本人ゲストが授業に来てくださることに対するポジティブな意見が見られることを受けて）授業での語りや学習者による授業評価へのフィードバックを通じて以下の点を語った。

- 母語話者である日本人ゲストの方が授業に来ることはあなたの日本語学習にとって大きなチャンスであり、得なことであるはず。
- したがって、ゲストの方が授業で気持ちよい時間を過ごしてもらえれば、そして「また来たいな」と思ってもらうことはあなたにとっても得であり、チャンスの広がりとなるはずである。
- しかし、教師があなたにとって常に一番良い教え手・サポーターではないように、また同じクラスメートが常にあなたにとって一番良い教え手・サポーターではないように、ゲストの方もまた常に一番よい教え手・サポーターとは限らない。
- クラスの全員が学習目標を達成するために、そして自分の日本語能力を高めるため、どのようにゲストの方と接していけばよいかクラスでよく考えて動いてほしい。

更に、授業と平行して、受講者による授業評価や教師による授業観察メモ⁷（2009年9月～2010年4月）、録画・録音記録（2010年2月～4月）等のデータを収集した。そして、コース終了後、授業に参加してくださる日本人協力者の活用という視点を含め、0年生の意識・態度・行為（の変化）についての分析を行った。

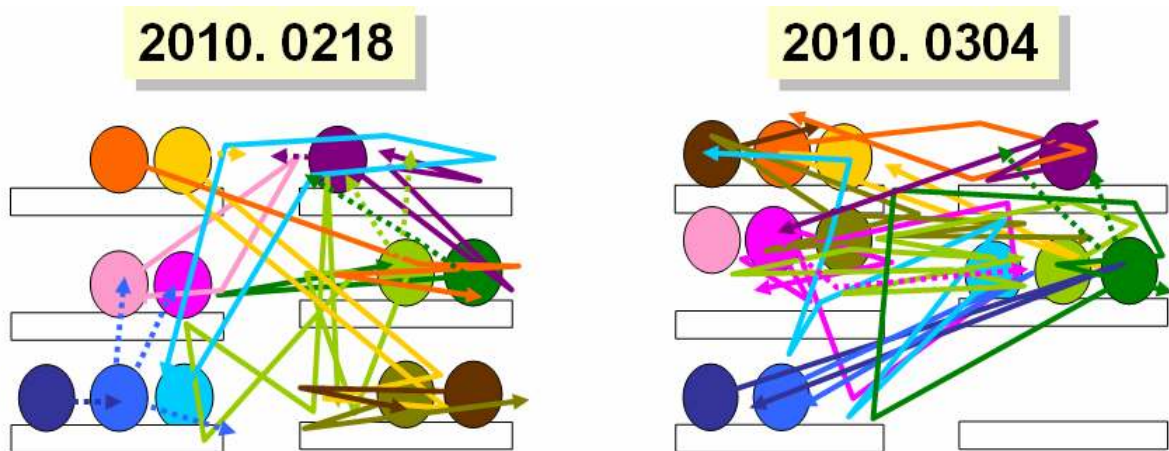
3. 結果と考察

3-1. ゲストがいない授業での動き

毎年0年生に対する授業はコンピュータ教室で行われている。同教室は、授業中にインターネットが自由に使える利点がある一方、机が固定されモニターも設置された状態であることから教室の移動には制限がある。しかしビデオ録画データや教師による授業観察メモを見ると 2009/2010 年度もこれまで同様「自分がわかる・できるため、そしてクラス全員がわかる・できるためにどう動けばよいか」を考え、必要に応じて教室を移動し学び合う0年生の姿が認められた。



2009年9月24日の授業（少しずつ座っている位置が変わっている）



2010年2月18日、3月4日の授業（実線は移動、点線は声かけ）

10月

- 相手の（教えられなくたってできるという）プライドを傷つけないように「教室が暑いから窓の近くにきたよ～」と近づいていく姿。
- 「この授業時間だと全員理解が達成できません。」という0年生側の訴えから（教師は教室からいなくなる可能性が高いという条件付で）授業枠を30分延長。

11月

- 「どんどん人が来ちゃう。みんな私をほっとけない」「今日は特に学習を進める必要がある2人に集中した。」など「クラス全員理解」が教室風土・文化化する兆しが見える。

2月

- 0年生には高校生、他大学の学生、社会人、主婦などいろいろなタイプの学習者がいる。仕事や（他機関の）授業の関係で遅れてくる人もいるが、遅れてきて1人で勉強しがちな人に「一緒にやろう！」と声をかける姿が見られる。

4月

- もっと知りたい、もっとわかりたいと「あの資料では？もっと他にないの？」という声かけや「教員室にある資料も読みたい」と教師に要求する姿が見られる。

学習者の言動から見える学習者の姿

3-2. ゲストがいる授業での学習者の態度や動き

3-2-1. 授業評価・授業観察メモ・ビデオ記録より

授業が行われた2009年9月から12月、2010年2月から4月までの間の計22回の授業でゲストの参加があった。内訳は以下の通りになる。

月	9月	10月	11月	12月	2月	3月	4月
回数	1	7	5	2	2	3	2

授業へのゲスト参加の回数

これらの授業に対する授業評価のうち、ゲストに関する記述は全部で51あった。これらは大きく以下の4つのタイプに分けることができた。

① 嬉しさ・ゲストに対するポジティブな評価（以下：「喜び」）計20

- ゲストが来ると嬉しい。
- ゲストは親切だった。

② ゲストに対する気配り（以下：「気配り」）計1

- ゲストが楽しく時間を過ごせるようやれることをやった。

③ ゲストに対する戸惑い・迷い（以下：「戸惑い」）計4

- たくさんゲストがいて授業目標の達成が難しかった。
- ゲストがちょっと「優し」すぎた。

④ 自分やクラスの学び、目標達成、自己評価（以下：「学び」）計26

個人レベルでの学び

- ゲストの話しがよくわかるようになってきた。
- ゲストとたくさん話しながら今日の文法の練習をした。

クラスレベルでの学び

- クラスメートともやりとりをし、ゲストとも話をした。
- どのグループがゲストと話がうまくいっているかに注意した。

これらの記述を時系列で見ると、2つの変化をはさんだ3つの時期に分けることができた。

「喜び」の時期	「戸惑い」の時期	「学び」の時期
1～3回目（9月、10月）	4～6回目（10月）	7回目～（10月～4月）
「嬉しさ」の記述が目立つ。	「学び」の記述が増え、同時に「戸惑い」も見られる。	「戸惑い」が消え、「学び」の記述の割合が増える。
喜び（7）、学び（1）	学 び（9）、喜 び（6） 戸惑い（4）、気配り（1）	学び（16）、喜び（7）

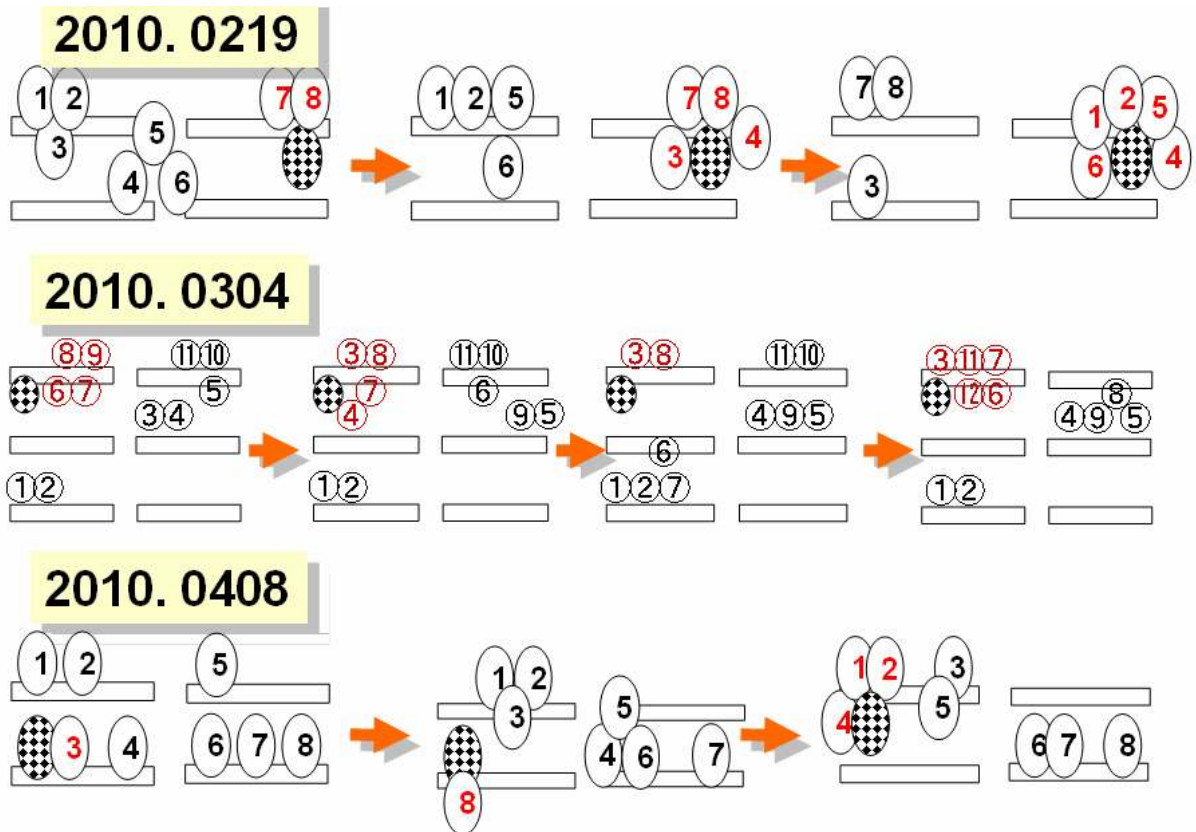
「喜び」の時期では、ゲストがクラスにいる喜び、そしてゲストが親切に自分たちと話をしてくれる喜びが記述されたが、「戸惑い」の時期になると、ゲストと話をすることと授業目標の達成の両立をどうすればいいかの迷いが見られるようになる。しかし「学び」の時期になるとゲストへの感謝の気持ちがある一方で、個人レベル・クラスレベルでの授業目標達成とゲストがクラスにいる状況を積極的に結びつけようとする記述が目立つようになる。この点、自ら、クラスの目標を達成するために、学習者がゲストと折り合えるようになってきている姿が浮かび上がる。

また教師による授業観察メモのうちゲストに関する記述（計7）を見てみると、「喜び」「戸惑い」の時期と、「学び」の時期でその記述に小さい変化が見られることがわかる。

「喜び」「戸惑い」の時期	「学び」の時期
1～6回（9、10月）	7回目～（10月～4月）
全員がゲストに群がりゲストのイニシアチブで学習を進めるということはなく、授業目標を達成するために教室を立ち歩く動きが見えた ⁸ 。	目的意識をもってゲストと接する姿、学習者がイニシアチブを取る姿、クラスメートと相談しながら（公平に）ゲストと接する姿が見えた ⁹ 。

「喜び」「戸惑い」の時期においても全員がわっとゲストに群れるということはなく、ゲストと話をする者も入れば授業の目標を達成するためにゲストとは絡まずクラスメートと学習を進める姿が見られた。しかし、ゲストとの話が終わった学習者達が他の学習者にゲストを譲ろうとしても、回りがそれにこたえず立ち往生するなどの場面も見られた。一方、「学び」の時期になると、まず、ゲストが教室に入って来る段階から、「ゲストに駆け寄り挨拶をし、仲間がイスを用意したところにゲストを誘導して座ってもらい一緒に活動を始める」という行動を取るようになり、「複数名のゲストが来た場合に、多くのゲストと話をしようとするすべてのゲストのいるグループ¹⁰に入る」「ゲストが移動すると一緒に移動し、複数のグループに入る」「ゲストに授業活動について説明し、活動意図を理解してもらおう」「ゲストと話をしていた学習者達が離れると、別の学習者達がゲストに近づく」「同じゲストとだけ話することがないよう、学習者同士で声を掛け合う」等、授業におけるゲストの利用とそのための環境作りに配慮する動きが見られるようになった。

授業観察メモから見られる「学び」の時期における学習者の態度は、ビデオ記録からも伺うことができる。



2010年2月19日、3月4日、4月8日の授業

(模様楕円がゲスト、同番号は同学習者、赤はゲストとやりとりをしている学生を表す)

3-2-2. ゲストとの会話記録より

日本人ゲストとの会話授業における学習者のハンガリー語使用を調査した若井（2008）は、学習者の母語（ハンガリー語）使用場面を、「習得」（語彙・文法・表現の説明・確認・相談）、「課題達成」（課題内容に関する議論）、「インターアクション」（発言内容の確認、補足、反応や、ゲストとの意味交渉成立のためのアドバイス）、「参画」（参加していない学習者への呼びかけ、会話についていけなくなったときの「Help me!」）に分類した。一方、今回の「学び」時期における学習者とゲストとの会話プロトコルを見ても「習得」「インターアクション」「参画」場面でのハンガリー語使用が見られたが、この他、日本語での訂正や代弁を行うことで「インターアクション」をスムーズに行う例も確認できた。

プロトコル例1（習得）¹¹

ゲ：結婚しているんですか。

1：はい。主人も車の会社員です。

ゲ：どこですか。

1：クノールバンパー。ちいさい会社です。**brake** はハンガリー語で何？

2：**brake?** ブレーキ

1：ブレーキの会社。本社はドイツにあります。

プロトコル例2 (インターアクション)

ゲ：おにいさんと今2人ですんでいますよね。だからさびしくない？
1：さびしくないですか？
2：いいえ。
1：**反対に答えないと駄目だよ。**
1：はい。
ゲ：さびしくない。
1：はい。
ゲ：大丈夫なんだ。そっか。

プロトコル例3 (参画)

1：わたしはレストランで食べました。
ゲ：一度だけですか。
1：はい
ゲ：おいしかったですか。
1：はい。
2：**あなたも何か質問しなさいよ。**(小さい声で)
3：じゃ休みに何をしますか。
ゲ：休みというのは？

プロトコル例4 (日本語での代弁・訂正)

1：でも、地下鉄の駅は、**カイダン**・・・
2：階段 (代弁)
1：がありますから、地下鉄の駅へ行けません。それは大変です。
2：そして、最近自転車を使う人は大きい
1：くなりました。 (訂正)
ゲ：ふえました。
2：はい。

また、学習者同士だけで問題が解決できない場合は、ゲストも加わってインターアクションを完成させる動きも見られたり、学習者同士の会話がメインでそこにゲストが入るパターンや、学習者同士のインターアクションを進めるためにゲストの力を借りるなど、課題達成のためのゲストとの係わり合いに若井(2008)では観察されなかったバラエティも見られた。これらの例は学習者が自分達の学習を達成させるためにゲストを利用していることを裏付けている。

プロトコル例5 (ゲストが加わってのインターアクション成立)

1：はい。えと、うん、とてもたくさん、**イトコって言葉忘れちゃった。**
2：**私もわかんないよ。じゃあ、こうやって言えば・・・**

1：いもうと
2：たぶん、母の兄弟
ゲ：おばさん
1：ちょっと待って、今調べてみる。
2：子供
ゲ：いどこ？
1、2：いどこ～！
1：とてもたくさんいます。

プロトコル例6（学習者同士のやりとりにゲストが反応する）

1：電話をかけたあとで、ばんごはんを食べました。一人で。うふふ
2：何を食べましたか。
1：お好み焼・・・ふふふ・・・わたしはつくりました。
ゲ：本当？
1：本当。
2：さびしかったですね。
1：さびしい？・・・ふふふ。いいえ。

プロトコル例7（学習者同士のインターアクション成立のためゲストをリソースとして利用）

（1と2が音楽について話している。）
1：まりこさん、例えばギターとピアノと・・・なんて言いますか。
ゲ：がっき
（1と2が話を続ける）

4. 結果及び今後の課題

筆者は、日本人協力者がイニシアチブを取ることで学習者が協力者のペースに巻き込まれてしまわないためには教師が細かい環境の整備が重要となるとする先行研究の提言に対し、学習者を信じ「教師そして特定のクラスメートが自分にとって最良の教え手でないように、ゲストも常に最良の教え手ではない」ことを語り、「学習目標をゲストの方に伝え、必要であれば自分達にとってよい形で動いていただけるよう理解を求める」ことを学習者に要求すれば、そのような事態に陥ることを防ぐことは可能であると予想した。そして本研究におけるデータ分析結果を見る限り、この予想は間違っていないことがわかった。

もちろん、教師の授業メモ等を振り替えてみると、「学び」の期間であってもゲストが主導権を握っている集団の存在が見られたり、ゲストを巻き込みたいのだから自分達からは恥ずかしくてゲストに声をかけられず、回りもそれに手を差し伸べなかったため、結局ゲストが近づいたときに教師が一声かけてゲストとその学習者達が一緒に学習できるようにした等、学習者の動きに対して満足していない記述も見られた。自分達の学習を効果的に進めるため、ゲストの方を巻き込んでいくためには、か

なり高度なコミュニケーション技術が必要である。今後もそれを学習者達に求め続けていくことを今後の課題としたい。

参考文献

- Falus Iván (2003): Az oktatás stratégiái és módszerei. In: Falus Iván (szerk.): Didaktika. Nemzeti Tankönyvkiadó, Budapest. 243-296.
- トムソン木下千尋、舛見蘇弘美 (1999) 「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者—その問題点と教師の役割—」『世界の日本語教育』9. 15-28
- 西川純 (2006) 『「勉強をなさい！」を言わない授業』東洋館出版社
- 三崎隆、水落芳明、西川純 (2009) 『「学び合い」ライブ出前授業の学習者に対する教育効果』『臨床教科教育学会誌』9-1. 67-74
- 若井誠二 (2008) 「正義感のあるクラスを目指して 教師の取り組みと日本人セッション授業での学習者の姿」『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 20』. 34-44
- 若井誠二 (2009) 「日本語授業における『学び合い』と他者とのかかわり」 『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 21』. 10-16
- 若井誠二 (2010) 「学習者による日本人ゲストの活用」『日本語教育連絡会議論文集 Vol. 22』. 84-92

¹西川純 (2010) 『学びあい』の手引書 (<http://jun24kawa.web.fc2.com/manabiai/tebiki/tebiki.pdf>)

² Falus(2003)は教授方法を「教授課程における一定で何度も使用される要素の集まり、教師と学習者の活動の一部で、各種目的達成のために様々な教授方略に組み込まれる (255)」と定義し、教授方略を「具体的な目的達成のため理論的に組み立てられた方法やツール、組織形態・モード等の複合システムで、それに合うよう整えられた学習環境で実現するもの (247.)」と定義づけている。「学び合い」という言葉は、複数名によるコミュニケーションの中での「お互いに教えたり教えてもらったりしている状態・場面 (教え合いと同義)」「(自分から働きかける場合、そうでない場合もあるが) お互いのやりとりから学ぶ状態・場面」を指すことが多く、教育界では4～6名の小グループで行う学習方法である協同学習を指すことが多い。しかし西川は本論で上げた学校観・学習者観を持った教師の取る教育ストラテジー (Falus2003:247) により発生する現象及び教室文化を学び合いとしている。この両者を区別させるため西川は二重鍵括弧を加えた『学び合い』という語を使用している。

³ 2011年の入学試験より日本語試験が入学試験科目から排除されるため2010/2011年度では初めて0年生が開講されなかった。

⁴ 西川純『従来型指導的『学び合い』の手引き書』(<http://jun24kawa.web.fc2.com/manabiai/tebiki/anzhen.pdf>)

⁵ 授業評価については、それに対する教師 (筆者) のコメントを含め <http://kre-japan.g.hatena.ne.jp/KRE2/>で可視化した。

⁶ 原文はハンガリー語

⁷ 同じように『学び合い』に取り組んでいる教師のブロググループ <http://manabiai.g.hatena.ne.jp/>にて可視化した。

⁸ <http://manabiai.g.hatena.ne.jp/szeidzsi/20090925#1253892879>
<http://manabiai.g.hatena.ne.jp/szeidzsi/20091003#1254551337>
<http://manabiai.g.hatena.ne.jp/szeidzsi/20091016#1255656021>

⁹ <http://manabiai.g.hatena.ne.jp/szeidzsi/20091023#1256276926>
<http://manabiai.g.hatena.ne.jp/szeidzsi/20091030#1256921194>
<http://manabiai.g.hatena.ne.jp/szeidzsi/20100220#1266615145>
<http://manabiai.g.hatena.ne.jp/szeidzsi/20100408#1270739216>

¹⁰ 教師によって決められた固定したグループではなく、自然に集まる集団を指す。

¹¹ 斜体文字は実際にはハンガリー語、「ゲ」は日本人ゲスト、数字は学生を表すがプロトコルごとに表す学生は変わる。